Akita University

秋田地理，第24号，20—22（2004）

鳥海山登山ルートと水文環境

利部　慎・鎌田大作・菅原仁人・湊　聖佳・若狭真紀（秋田大学教育文化学部地理学研究室学生）・清野太門（秋田県立秋田北高校・秋田大学大学院教育学研究科）・肥田　登（秋田大学教育文化学部）

私たちは、2003年10月10日、矢島（祓川）登山口より鳥海山の登山を行った。登山口を朝８時に出発、山頂に午後１時頃着。約１時間半の休息の後、同じルートで矢島に戻った。登山口への着時刻は17時であった。当日は、終日、晴天と無風に恵まれ、まれに見る登山日和であった。

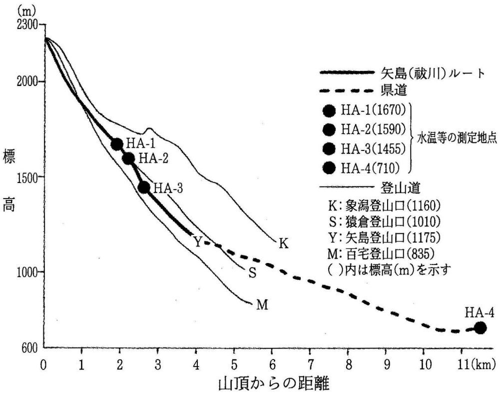
火山は、一般に“地上に突き出た貯水池”と言われるほど地下水を豊富に蓄え、山麓には数多くの湧水を生み出す。鳥海山もまた水文学的な観点から夢の尽きないフィールドである。今回の私たちの登山は、登山そのものを楽しむことのほかに、ルート沿いの水文学的な特徴の観察を併せ持つことを目的とした。

地形図（1：25,000「鳥海山」、「小砂川」）によると、秋田県内から鳥海山へ向かう登山道としては、四つのルートが記載されている。登山口別に、象潟口、矢島口、猿倉口、百宅口からの各ルートである。山頂からこれら四つの各登山口までのルートにそった地形断面は、第１図に示すとおりである。

今回の登山では、矢島（祓川）ルートを選んだ。このルートは、四つのルートの中では最短であり、登山口と山頂を結ぶ傾斜はもっとも大きい。さらにこのルートは、水文学的特徴からいうと、子吉川流域の西南端に属す（第２図）。ルートに沿っての降水は、いずれ子吉川の河口に到達する。

登山口から山頂に向けて、賽の河原、御田と呼ばれる小規模な湿地、深く刻まれた渓谷、さらに当日は御田の周辺の万年雪、加えて９合目付近から山頂にかけては約10cm ほどの新雪が観られるなど、いずれも水文学的には興味深い事象であった。また、当日は、先立つ期間の降水量が少なかったためか、７合目付近から山頂にかけては概して乾いているように見受けられた。

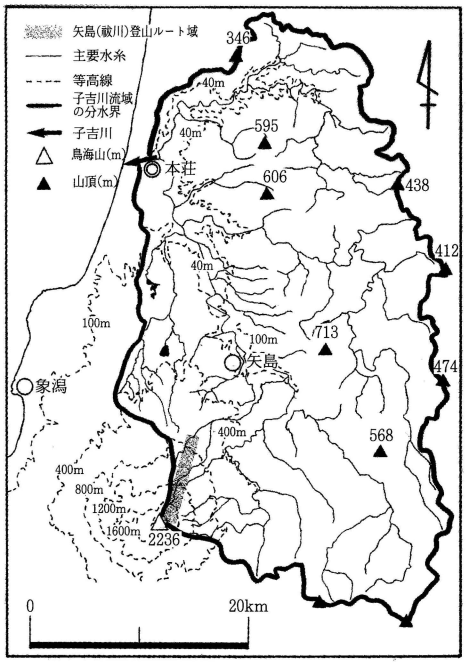
登山のルート沿いに限られたが、現地で確認できた水体については、水温と EC をその場で測定した。ほか、ルートをはずれた標高の低い位置でも同様の測定を１か所で行った。測定の位置は第１図に、測



第１図　登山道の断面及び水温等の測定地点

注１）地形図 1：25,000「鳥海山」「小砂川」より作成。

注２）HA-1〜HA-4 は第１表に同じ。



第２図　鳥海山及び子吉川流域

注）国土地理院発行20万分の１地勢図「秋田」・「酒田」により作成

Akita University

第1表　矢島（祓川）ルート沿いの水温等の測定結果

測定地点	位　置	標高 (m)	時刻	水温 (℃)	EC (μS/cm)	注　記
HA-1	39° 06′ 35″ N 140° 03′ 27″ E	1757	15:23	5.0	45	沢中のたまり水 (地下水のしぼりだし)
HA-2	39° 06′ 38″ N 140° 03′ 52″ E	1633	16:00	5.3	26	沢(小河川)の水
HA-3	39° 06′ 51″ N 140° 03′ 57″ E	1455	16:33	15.2	26	湿原のたまり水
HA-4	39° 10′ 10″ N 140° 05′ 05″ E	710	18:06	8.7	64	湧水の由 他地点からの導水

注 1）2003年10月10日の測定。
2）位置は GPS、標高は地形図。水温と EC は測定器機による。
3）HA-1〜HA-4 は第1図に同じ。

定の結果は第1表に示した。

以上、今回は矢島（祓川）ルート登山の体験をしながら、鳥海山のもつ水文学的な諸相の一端にふれることができた。これを機会に本ルートはもとより、ほかの三つのルートを含めてさらに観察を続行し、「鳥海山の水文学」の夢を将来に向けて膨らませたい。

最後に、今回の登山にあたって現地の案内をお願いした佐々木博雄氏（ヒロスポーツ企画）に厚く御礼を申し上げる。

付記：第1図は、鎌田・菅原・湊・若狭が作成し、第2図は清野が作成した。